

中国人技能実習生による日本語あいづち習得の縦断的習得研究

山中鉄斎
(順天大学校)

要旨

本稿は、日本で仕事をしながら日本語を自然習得していく、中国人技能実習生の日本語あいづち習得の状況を調査したものである。これまで、外国人技能実習生を対象に日本語習得を調査した研究は数少なく、実習生のあいづちの習得研究は、管見の限り現在まで行われていない。本稿では、農家で働く1期生3名、2期生3名の合計6名の中国人技能実習生を対象に、自由会話形式で1期生は10ヶ月、2期生は4ヶ月に渡り会話データを収集した。これらのデータの中から、日本語あいづちの習得過程を「形式」「機能」「形式と機能の関係」の面から分析し、先行研究と比較することで、二つの中国人技能実習生のあいづち習得仮説、一つの自然習得環境下における一般的日本語習得仮説を導いた。

【キーワード】 中国人技能実習生、あいづち習得、自然習得

1. 研究目的

水谷(1988)によると、日本語の会話は「対話」ではなく「共話」と呼ぶべきものであり、一つの文を一人の人間が完成しなければならないわけではなく、むしろ相手に後半の完成を委ねることによって、ともに文を作る態度が歓迎される。また、堀口(1997)は聞き手の言語行動について、以下のように述べている。

話し手が話を進めていくためには、聞き手からの反応や働きかけや助けが必要であり、話しことばによるコミュニケーションは聞き手の積極的な参加によって成立するのである。このような聞き手からの反応や働きかけや助けは、笑いやうなずきなどによって非言語的に表れることともあれば、あいづちや応答や質問などによって言語的に表れることもある。(堀口1997:38-39)

一方、多くの日本人は、外国人技能実習制度というものが存在し、実習生たちの労働力が日本にとって不可欠なものとなっていることに気づいていない。実習生の多くは、一般的な日本社会から切り離されたところで生活をしており、逃亡を防ぐという名目によって社外の日本人との接触が制限されている場合が多いため、殆どの日本人は実習生と接する機会がないことがその一番大きな理由と言えるだろう。実習生の人数は2008年には191,816人となっており、我が国の外国人登録者数の10%近くを占めている。

本研究では、日本人と接触する機会のほとんどが職場であり、接触する日本人の殆どが自分の父親ほどに年齢の離れた上司に限られているという、極めて特殊な環境下で日本語を自然習得していく実習生が、「共話」において会話をスムーズに進めるために重要なあいづちをどのように発達させているのかを明らかにする。特に、あいづち形式「ウン」「ハイ」「ソウ系⁽¹⁾」に焦点を当て、比較対象として日本語学校で日本語を学ぶ中国語母語話者のあいづち発達を調査した寺尾（2008）を用いる。

2. 「あいづち」の定義

あいづちの定義づけは先行研究によって様々であるが、堀口（1997: 77）は、

「あいづちの定義はまだ明確で一致したものになってはいないものの、話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現（下線部筆者）という点では一致している」

と述べており、この考え方を基に多くのあいづち研究がなされている。一方、今石（1993）では、あいづちの定義に必要な要素の一つとして「話者交替の有無」を挙げており、これは堀口の言う「話し手が発話権を行使している間」という部分と大きく異なる。本研究では、堀口の定義に従い、「話者交替の有無」という視点からはあいづちを規定しないこととし、「形式」「機能」の面から更に細かく分類をする。

2-1 形式

杉戸（1989）は、発話の受け継ぎの際の参加者の言語形式の選択を「あいづち的な発話」と「実質的な発話」に区別して論じている。これら二つの発話を杉戸（1989:50）は以下のように定義している。

「あいづち的な発話」——ハー、アー、ウン、ソーデスカ、ソーデスネーなどの応答詞を中心にした発話。先行する発話をそのままくりかえすオーム返しや単純な聞き返し。エーッ、マアー、ホーなどの感動詞だけの発話。笑い声。つまり、実質的な内容を表現する言語形式（上の、たんなるくりかえし以外の名詞、動詞など）を含まず、また、判断、要求、質問など聞き手に積極的な働きかけもしないような発話。

「実質的な発話」——上の、あいづち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含んで、判断、説明、質問、回答など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話。

寺尾（2008）では、この杉戸（1989）の定義に準じて、「実質的な内容を表現する言語形式を

含まず、また、判断、要求、質問、回答など、事実の叙述や聞き手への働きかけもしないような発話」に相当する形式をあいづちとして取り上げている。本研究では、寺尾（2008）と同様の方法を採る。尚、同じ形式が重複するあいづちについては、重複しないものと同様に扱い、一回のあいづちとして数えた。具体的には、「ハイハイハイ」は「ハイ」と同様に、「アーアー」は「アー」と同様に扱った。

2-2 機能

あいづちの「機能」について、寺尾（2008）は次のように述べている。

あいづちの「機能」についての各研究者の捉えかたは、どこまで細かく分類するかというところでは異なるものの、「話し手の話を聞いている、あるいは了解したという信号」という機能を含む点ではほぼ一致している。寺尾（2008: 95）

本稿では、寺尾（2008）に従い、今石（1993）の分類方法を援用して⁽²⁾、あいづちの機能を以下の6種類に分類する。

①「聞いているという信号」

情報が不確定のときに打つ、理解している信号の機能。聞いているという信号。

②「理解しているという信号」

情報が確定しているときに打つ、理解している信号の機能。

③「確定+肯定的態度」

②に肯定的な態度が加わっているもの。

④「確定+否定的態度」

②に否定的な態度が加わっているもの。

⑤「確定+感情の表現」

②に感情や感動の態度が加わっているもの。

⑥「未分類」

以上に含まれないものは未分類として扱う。

3. 調査の概要

3-1 研究対象

本研究の研究対象者はA県の農家で働く中国人実習生で、1期生3名、2期生3名の合計6名である。1期生は全員が中国の山東省に配偶者と子どもを残して来日した20代後半の女性たちで、2期生は中国山東省出身の20代前半の独身女性たちである。現在6名は同じ寮で生活をしている。調査開始時の日本滞在歴は、1期生が10ヶ月（来日前に2ヶ月の座学あり）、2期生が2ヶ月（来日前に5ヶ月の座学あり）であった。1・2期生共に、来日前は、工場、スーパー

一、電気屋など、農業とは無関係な仕事に従事していた。実習生になる前の研修生の間⁽³⁾は、週1回、4時間の日本語座学の時間があるが、その内容は来日1年後に実施される検定試験に向けた専門用語の学習と日本語による雑談である。

実習生の人的ネットワークは非常に限られており、それを自発的に広げていくことは難しい。密に接する日本人は、社内の人々を除けば調査者のみであり、配属先が若い労働力の不足している田舎町の農家であるため、社内にいる日本人の多くが実習生とは年齢が大きく離れた人々である。

3-2 データ

言語データは全て自由会話形式で、録音後に文字化を行った。録音時は、リビングルームにある一つのテーブルを囲んで、お菓子やジュースを持ちこみ、できる限り自然な会話ができるようにリラックスした雰囲気を作ることを心がけた。また、録音前に皆でバドミントンをしたり、録音後に一緒に中国のDVDを鑑賞したり、実習生たちの手料理を御馳走になるなど、実習生の会話を録音しに来るだけの日本人ではなく、実習生の友人で大学院に通っている日本人として受け入れてもらうために、録音をしていない時間も大切にするように心がけた。

1期生は来日10ヶ月目から9ヶ月に渡り、合計6回284分の言語データを収集した。2期生は、来日2ヶ月目から4ヶ月に渡り、合計4回153分の言語データを収集した。1・2期生共に、分析に当たっては、3名を個別に見るのではなく、1期生と2期生を一つのグループとして扱った。

4. 分析・結果

収集した言語データで主に使用されたあいづち形式「ウン」「ハイ」と使用されなかった「ソウ系」について、「形式」「機能」「形式と機能」三つの視点から分析した。1・2期生が同じ環境で生活していることと、1期生のデータが来日10～19ヶ月目、2期生のデータが来日2～6ヶ月目のものであることを考えると、両者の習得状況を、来日2ヶ月目から19ヶ月目の連続したデータとして繋げて分析することも可能であると判断し、以降、図表でデータを示す場合はその点を考慮して、2期生のデータを先に示す⁽⁴⁾。また、比較対象として、同じ言語データ内で日本語母語話者である調査者が使用したあいづちの分析も行った。調査者と筆者は同一人物であるが、ここでは、日本語母語話者としての客観的地位を持たせるために、筆者ではなく調査者という言葉を使用している。

実習生によって使用されたあいづち形式の特徴としては、2期生は全データで「ハイ」を最も多く使用し、使用率は常に60%以上であった。1期生でも他の形式に比べて「ハイ」の使用割合が高いものの、1・2期生を連結して考えると、その割合は減少傾向にあると言える。また、「ソウ系」の産出が一度も見られなかった。興味深いことに、寺尾(2008)の結果では、最も使われた形式は「ソウ系」(66.6→39.1→25.5%)から「ハイ」(8.6→40.2→52.8%)へと変化している。

実習生が「ソウ系」を一度も使用しなかった理由については、「ソウ系」と「ハイ」がどのような機能で使用されているかということに言及しなければならないため、5-3で考察を加える。

4-1 形式

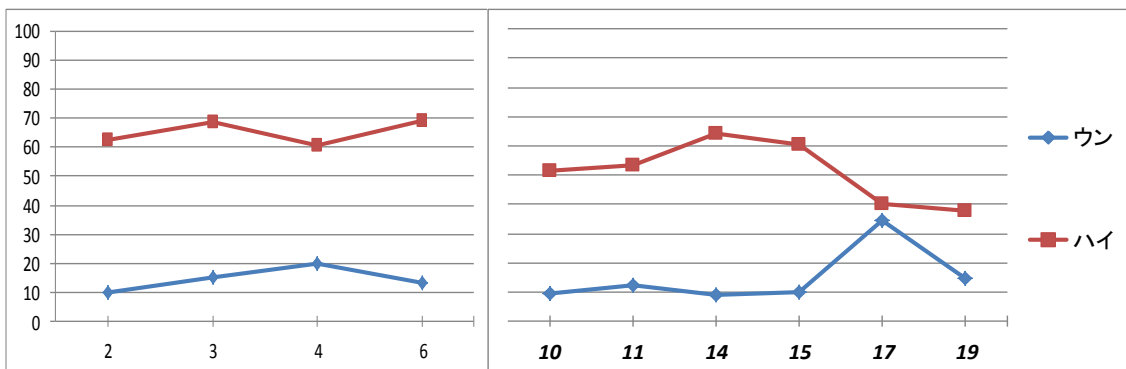


図1 実習生が使用した主なあいづち形式の推移⁽⁵⁾
(縦軸は%、横軸は日本滞在歴で単位は月)

4-2 機能

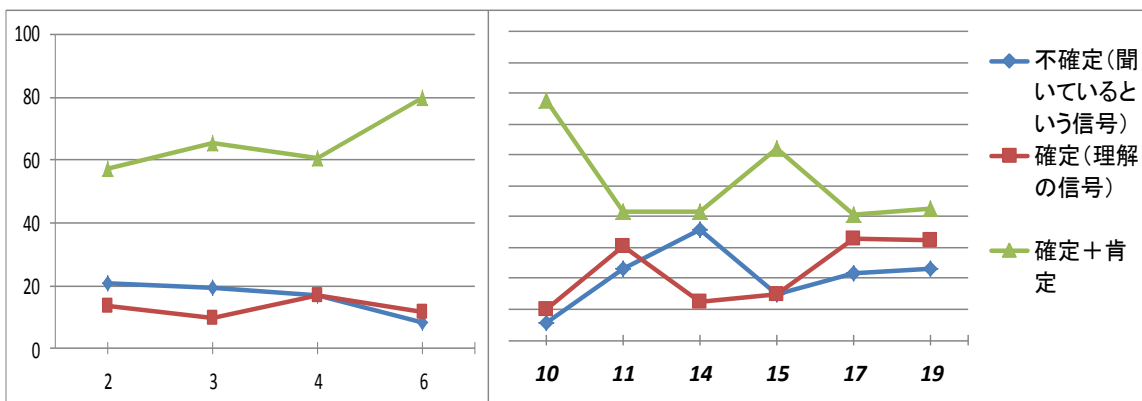


図2 実習生が使用した主なあいづち機能の推移
(縦軸は%、横軸は日本滞在歴で単位は月)

実習生によって使用されたあいづち機能の特徴として、1・2期生共に「確定+肯定の態度」が一番多く使われている。「聞いているという信号」や「理解の信号」の機能の使用割合は、2期生が10~20%程度、1期生が20~30%程度となっており、1・2期生を連結して考えると3機能の定着が進んでいることがわかる。2期生だけを見ると、全データにおいて「確定+肯定の態度」が55%以上を占めており、寺尾(2008)の、初級の段階において使用されたあいづちの機能は「確定+肯定の態度」にほぼ収束される、という結果と大まかには一致していると言える。寺尾はその理由として「初級学習者は話し手の発話を熱心に、できる限り肯定的に聞いているという態度を表明したいと考えている」と述べている。一方、寺尾の結果では「聞いているという信号」が

(0.0→4.7→11.7%),「理解の信号」が(1.1→4.0→0.6%)であり,1・2期生はこの2機能の使用率が10%~30%であることを考えると,この二つの機能の定着は実習生のほうが進んでいることがわかる。

4-3 形式と機能

実習生「ウン」の機能	2	3	4	6	10	11	14	15	17	19
不確定(聞いているという信号)	6(54.5%)	6(42.9%)	4(30.8%)	4(25.0%)	5(33.3%)	20(74.1%)	9(81.8%)	4(36.4%)	29(41.4%)	8(33.3%)
確定(理解の信号)	2(18.2%)	1(7.1%)	2(6.3%)	1(6.3%)	1(6.7%)	2(7.4%)	1(9.1%)	2(18.2%)	21(30.0%)	8(33.3%)
確定+肯定	3(27.3%)	7(50.0%)	7(53.8%)	11(68.8%)	9(60.0%)	5(18.5%)	1(9.1%)	5(45.5%)	19(27.1%)	8(33.3%)
確定+否定									1(1.4%)	
確定+感情										
未分類										
計	11(100.0%)	14(100.0%)	13(100.0%)	16(100.0%)	15(100.0%)	27(100.0%)	11(100.0%)	11(100.0%)	70(100.0%)	24(100.0%)

図3 実習生が使用したあいづち形式「ウン」の主な機能の割合

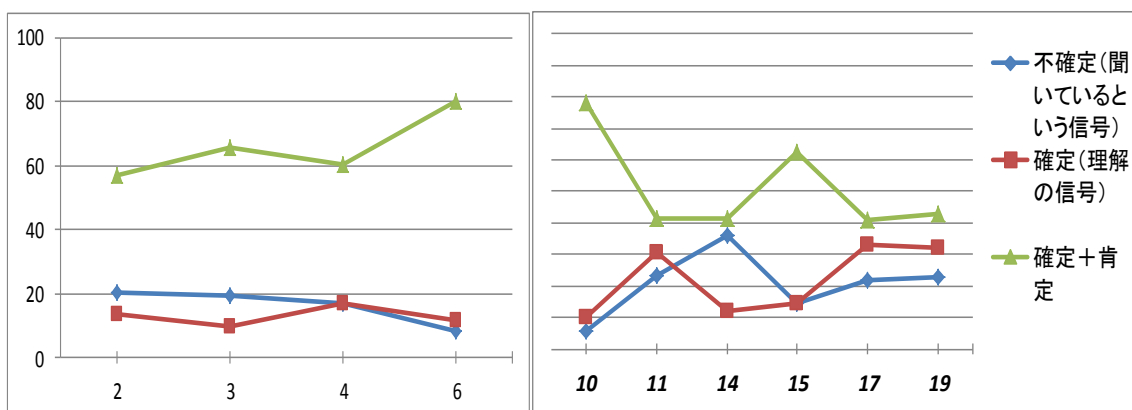


図4 実習生が使用した「ハイ」の機能の推移⁽⁶⁾

(縦軸は%,横軸は日本滞在歴で単位は月)

調査者	理解の信号	確定+肯定
ソウ系(総数 122)	52%	48%

図5 調査者が使用したあいづち形式「ソウ系」の機能

ここでは,実習生が主に使用しているあいづち形式の「ウン」「ハイ」がどのような機能で用いられているかということ进行分析する。

「ウン」の機能については,1・2期生共に,「聞いているという信号」「理解の信号」「確定+肯定の態度」を中心に使用しており,3機能が定着していることがわかる。定着という面から見ると,2期生も同等に進んでいることから,「ウン」の機能は比較的早い段階で定着されること

が分かる。

「ハイ」の機能については、実習生が使用したあいづち形式の多くは「ハイ」で占められているため、図2と図4が同じようなグラフになっている。日本語母語話者であれば、あいづち形式「ハイ」が「聞いているという信号」「理解の信号」「確定+肯定の態度」の機能を持つということに異論はないであろう。一方、実習生は「聞いているという信号」の機能が2期生で12%、1期生で17%、「確定+肯定の態度」の機能は両者共に70%を越えており、この2機能は早い段階で定着していることがわかる。「理解の信号」の機能は、2期生が4%、1期生が13%となっており、定着が進んでいる。

あいづち形式「ソウ系」は、4-1でも述べたように、1・2期生共に、全ての言語データを通して産出されなかった。図5は、全データを通して調査者が使用した、あいづち形式「ソウ系」の全ての機能の割合を示したものであるが、調査者が使用した「ソウ系」の機能は「理解の信号」と「確定+肯定の態度」のみとなっている。

5. 考察

5-1 形式

実習生によって使用されたあいづち形式の特徴として、「ハイ」が最も多く使用されていることが挙げられる。2期生は全データで「ハイ」を最も多く使用し、使用率は常に60%以上であった。1期生も他の形式に比べて「ハイ」の使用割合が高いものの(初回51.6%、最後37.9%)、両グループを連結して考えると、その割合は減少傾向にあると言える。一方、寺尾(2008)の結果では、「ウン」と「ハイ」の形式については、「ハイ」が使用される割合がしだいに高くなり(8.6→40.2→52.8%)、「ウン」はしだいに使用されなくなっている(15.0→3.5→1.7%)。その理由の一つとして、寺尾は、1回目の調査以降に始めたアルバイト先で「ハイ」の定着が進んだ可能性が高いことを挙げているが、本研究における実習生の場合は、来日後すぐに仕事環境におかれるため、「ウン」よりも先に「ハイ」が定着したと考えることができる。

1・2期生を連結して考えると、来日17ヶ月目と来日19ヶ月目が他の時期に比べ「ハイ」の使用割合が減っている。あいづち形式の割合は、会話の内容によっても左右されるため、安易に結論を出すことはできないが、一つの可能性として実習生の生活環境要因を挙げることができる。実習生にとって、社外で密に接することのできる日本人は調査者のみであり、また、社内の日本人に比べ調査者は年齢的にも近い。この人間関係から推測されることは、以前は「ハイ」というあいづちを打つのが実習生にとって安全な方法だったが、調査者と出会い、友人としての人間関係が深まる中で、「ハイ」以外のあいづち形式を使用するようになったのではないかと推測される。逆に、今回の被験者の置かれた状況とは異なる、社外の日本人との関係を作り上げる機会がない実習生のあいづち形式は、3年後の帰国間際でも「ハイ」が多用されるのではないかと推測される。

一方で、実習生が使用したあいづち形式の中で、依然として「ハイ」が最も大きな割合を占め

ている理由として、母語である中国語のあいづちとの関係が挙げられる。熊（2008）では、中国語のあいづち詞には待遇性がなく、中国人は友人に対しても教師に対しても使用したあいづち詞の種類と頻度に差がなかったと述べられている。従って、中国語母語話者は相手との関係を配慮してあいづちを使い分けることに慣れていないと言える。寺尾（2008）の結果において「ハイ」の習得が急激に進んでいることや、逆に、本研究のように「ハイ」が習得された後に「ハイ」以外のあいづちを習得する際に時間を要するのは、人間関係に左右されずに使用できる「ハイ」の性質が、中国語母語話者にとって習得しやすく、使いやすいからであると考えられる。

5-2 機能

図2では、実習生によって使用されたあいづち機能の特徴として、1・2期生共に「確定+肯定の態度」が一番多く使われている。「聞いているという信号」や「理解の信号」の機能の使用割合は、2期生が10~20%程度、1期生が20~30%程度となっており、1・2期生を連結して考えると3機能の定着が進んでいることがわかる。2期生だけを見ると、全データにおいて「確定+肯定の態度」が55%以上（57.1→65.6→60.6→80.0%）を占めており、寺尾（2008）の、初級の段階において使用されたあいづちの機能は「確定+肯定の態度」にほぼ収束される、という結果と大まかには一致していると言える。寺尾（2008）はその理由として、「初級学習者は話し手の発話を熱心に、できる限り肯定的に聞いているという態度を表明したいと考えている」と述べており、本研究の結果においても寺尾（2008）の考察は一つの理由になり得るだろう。これに加えて、本研究の結果から、もう一つの理由について考察することが可能である。それは、自由会話形式という方法が持つ、ある種の不自由性である。本研究でも寺尾（2008）の研究においても、対象となる言語データは、特別なテーマを持たない自由会話形式で行われている。自由会話形式であれば毎回会話内容が変わるのは当然であるが、そこには、会話が成り立つ、ということが大前提として存在する。日本語学習者と自由会話形式でデータを収集する際、調査者は相手の日本語能力を気にしながら会話を進めるといふ努力をしており、相手が初級者であればあるほどその傾向は強くなるといえる。つまり、初級者との自由会話形式における自由の意味とは、日本語初級者と会話が成り立つような会話内容や会話方法で制限された中での自由、ということになる。会話を成り立たせるために中国語を使用したり、漢字を書いたりすることが時々あった2期生との会話は、1期生との会話に比べ、より制限された内容や会話展開であったといえるだろう。寺尾（2008）や本研究において、初級の段階において使用されたあいづちの機能が「確定+肯定の態度」の機能が多くを占めていることには、調査者が会話を成り立たせようとした結果、実習生が「確定+肯定の態度」の機能を多く使用してしまうようなものになっていたことも挙げられるだろう。このことは、1期生の結果からも裏付けることができる。図2を見ると、1期生では、初回の来日10ヶ月目のデータだけ「確定+肯定の態度」の機能が78.0%と他と比べて随分高くなっていることがわかる（78.0→41.6→41.5→62.4→40.9→42.9%）。これは来日11ヶ月目からあいづち機能の定着が劇的に進んだということではなく、初回の会話時では、1期生の日本語能力がどの程度なのかわからなかったので、

調査者が会話を成り立たせるために気を使いながら話を進めた結果といえるだろう。

「確定+肯定の態度」以外の機能については、寺尾（2008）の結果では「聞いているという信号」が（0.0→4.7→11.7%）、「理解の信号」が（1.1→4.0→0.6%）であり、1・2期生のこの2機能の使用率が10%～30%であることを考えると、この二つの機能の定着は実習生のほうが進んでいるといえる。これについては、生活環境から二つの理由が考えられる。一つ目は、日本語で仕事を覚えていかなければならない環境である。実習生は仕事の中で日本人と接せざるを得ず、単に話し手の発話を肯定的に聞いているという態度を表明するだけでは不十分で、自分が理解しているということを表現する必要性があり、それを表現するためには情報が不確定の段階でもあいづちを打つべきである、ということを経験から認識していたのではないかと考えられる。二つ目の理由は、自然会話のインプット量である。水谷（1988）では、日本人の会話で「聞いているという信号」の機能をもつあいづちを打つことが述べられている。実習生は、日本語での会話相手は全て日本人であり、勤務先に配属後の日本語習得は、ほぼ自然習得であるといえる。一方、寺尾（2008）の被験者は、日本人と接する機会は日本語学校の講師が主であり、調査の途中からアルバイトを始めたことにより、以前より日本人との接触が増えた、という環境下で日本語を学んでいた。実習生はこれと比べると日本人と接することが圧倒的に多いと考えられ、「聞いているという信号」の機能を持つあいづちのインプット量が多い分、習得も早く進んだと考えることができる。

5-3 形式と機能

実習生が使用した「ウン」の機能については、図3からわかるように、「聞いているという信号」、「理解の信号」、「確定+肯定の態度」を中心に使用している。1・2期生共に3機能の定着が進んでいることから、「ウン」の機能は比較的早い段階で定着していることがわかる。母語の影響を考えると、熊（2008）では、中国語のあいづちで最も使用される形式は「嗯系」であり、単独型あいづち詞の中では60%近くを占めていたという結果が出ている⁽⁷⁾が、ここで注意しなければならないのは、この中国語の「嗯」は日本語の「ウン」と発音が似ているということである。水野（1988）によれば、中国語の「嗯」は同意や肯定の意味を表し得ないが、待遇的な意味を含まないので話し手との関係によって使用が制限されることはない。つまり、待遇性に関するものを除けば日本語の「ウン」は中国語の「嗯」よりも使用範囲が広く、中国語母語話者にとって習得しやすいのではないかと考えられる。母語の「嗯」にない「確定+肯定の態度」の機能が早い段階で習得された理由としては、実習生の職場環境の影響が挙げられる。実習生が職場で接する日本人は全て上司であり、実習生たちに対して待遇性のないあいづち形式「ウン」を多く使用していることが予想され、このインプット量の多さが実習生の「ウン」の機能の習得を促進させたと考えられる。

「ハイ」については、4-3で述べたように、1・2期生共に3機能の定着が進んでいることから、実習生にとって「ハイ」の機能を習得することは特に難しいものではないといえるだろう。

ここで、「ハイ」と「ソウ系」の関係について考察する。4-3で触れたように、実習生は全データを通して「ソウ系」を使用しなかった。一方、寺尾（2008）の結果では、最も使われた形式は「ソウ系」（66.6→39.1→25.5%）から「ハイ」（8.6→40.2→52.8%）へと変化している。寺尾（2008）は初期に「ソウ系」が多い理由として、あいづち詞としての「ソウ」が自然習得である可能性⁽⁸⁾と、あいづちの直前がどのような形式であっても前文の内容を受けることができる「ソウ」の形式を汎用的に用いていることを挙げている。

これらの結果の違いを述べる前に、「ハイ」と「ソウ系」の機能について考えてみる。前述の通り、実習生は「ハイ」の機能である「聞いているという信号」「理解の信号」「確定+肯定の態度」の定着が進んでいる。一方、調査者が使用した「ソウ系」の機能は「理解の信号」と「確定+肯定の態度」のみである。このことを踏まえて、実習生が「ソウ系」を産出しなかった二つの理由は、

- ① 「ハイ」を先に習得してしまったことが「ソウ系」の習得を遅らせている。
- ② ①に加え、「ソウ系」のもつ形式的多様性が習得を遅らせている。

であると考えられる。次に、①と②を個別に考察する。

①では、「ソウ系」の習得以前に「ハイ」を習得してしまったために、「ハイ」を汎用化して使い、「ソウ系」の習得が遅れていることを指摘している。以下に具体例を挙げる。

（2010年8月8日、1期生5回目のデータより）

—前日が立秋だったので、秋になった、と実習生が言っている場面—

実：本当。カレンダーにある。

調：昨日から？

実：あ、秋。昨日から。

調：あ、立秋。

実：はい。

この会話例の場合、実習生は「ハイ」を使用しているが、「ソウ系」を入れても自然な会話になり、意味も変わらない。実習生はこのような場合に、常に「ハイ」を使用しているため、「ハイ」の定着が「ソウ系」の習得を遅らせているのである。では、何故、実習生では「ハイ」が先に習得されたのであろうか。この理由として、実習生の生活環境を挙げるができるだろう。3-1で述べたように、実習生が日本語で話す相手の殆どは仕事上の上司であり、親ほども年の離れた人であるから、「ソウ系」よりも待遇的性格をもつ「ハイ」を使用する方が都合がよかったのではないかと考えられる。次に、「ハイ」を先に習得すると「ソウ系」の習得が遅れてしまう理由について述べる。「ハイ」と「ソウ系」の機能の説明において、「ハイ」が主に三つの機能を持つのに対し、「ソウ系」は二つであることは先に述べた。つまり、「ハイ」の

ほうが使用範囲が広く汎用性もあり、「ハイ」→「ソウ系」の順序で習得するのは難しいように思われる。陳(2001)において、「≪「はい」系≫の出現位置で≪「そう」系≫を用いることは不可能である⁽⁹⁾」,と結論づけられていることから「ハイ」の使用範囲の広さが裏付けられるであろう。「ソウ系」→「ハイ」の順番で習得が進んだ寺尾(2008)の被験者が、「ハイ」の習得が急激に進んでいることも、「ソウ系」は「ハイ」で代用することができるということが大いに影響していると考えられる。

②における形式多様性というのは、「ソウ系」という表現の通り、あいづち詞「ソウ」を含んだあいづち形式は数多くあるという意味で、これらの多様性が「ソウ系」の習得に困難をきたしたのではないかと思われる。①と関連してくるが、実習生にとって便利な「ハイ」が早く定着したこともあり、それ以外のあいづち形式を使う機会の少ない実習生にとっては、「ソウ系」の複雑な形式の習得は難しいのではないだろうか。

以上のことから、次に挙げる自然環境下における一般的日本語習得仮説が導き出される。

仮説 自然習得環境下で、「ソウ系」の後に「ハイ」を習得する場合は習得が進みやすいが、「ハイ」の後に「ソウ系」を習得する場合は習得が進みにくい。

6. まとめ

これまで考察してきたことから、中国人技能実習生の日本語習得、及び中国人技能実習生に限らない自然習得環境下における学習者の一般的日本語習得について、以下のような仮説が導かれた。

—中国人技能実習生の日本語習得仮説—

- ① 「ウン」より「ハイ」の習得の方が早い。
- ② 「聞いているという信号」「理解の信号」の機能は、教室学習者より習得が早く進む。

—自然習得環境下における一般的日本語習得仮説—

自然習得環境下で、「ソウ系」の後に「ハイ」を習得する場合は「ハイ」の習得が進みやすいが、「ハイ」の後に「ソウ系」を習得する場合は「ソウ系」の習得が進みにくい。

7. おわりに

7-1 本研究の意義

本研究では、これまで日本語習得研究の対象になることがほとんどなかった外国人技能実習生との会話を録音、文字化し、使用された日本語あいづちの分析と考察を行った。あいづち研究で実習生を対象としたものは管見の限りなく、本研究の試みは、これまで研究されることのなかった実習生のあいづち習得という、新しい分野を広げたといえるだろう。

一般的な留学生たちのような教室習得者であれ、実習生などのような自然習得者であれ、会話を円滑に進めるアイテムとしてのあいづちの習得は、そのほとんどが自然習得に委ねられている。

本研究では、実習生という特殊な環境下で日本語を自然習得していく人々が、日本語のあいづちをどのように発達させているのかを生活環境との関わりからを明らかにしていくなかで、中国人実習生の日本語習得仮説を導き出すことに成功した。また、実習生にとどまらず、自然習得環境下における全ての日本語学習者にとってのあいづち習得仮説も導き出した。このように、現在に至るまで研究されることのなかった実習生の日本語あいづち習得を生活環境と関連付けて分析し、あいづち習得の実態を明らかにしただけでなく習得仮説まで導き出した本研究の持つ意義は、大いにあるといえる。

7-2 今後の課題

本研究は、芝農家で働く中国人技能実習生を対象としたが、対象者の数が1期生3名と2期生3名と少ないため、事例研究としては成り立つものの一般化することは難しい。さらに、1期生及び2期生をそれぞれ一つのグループとして扱ったために、個人差がどの程度あるのかについても触れることができなかつた。また、日本語母語話者の例として調査者のあいづちのみを扱ったが、日本語のあいづち使用は会話相手の影響を受けるため、日本語母語話者が一般的に使用するあいづち形式やあいづちの機能について、客観性に乏しい面があることは否定できない。今後は、目上、対等、目下の関係にある日本語母語話者同士の会話からあいづちの形式と機能を導き出し、学習者とのあいづち比較の対象とすることで、学習者のあいづち習得がどの程度まで進んでいるのかを明らかにする必要があるだろう。また、それらに加えて、実習生の職場での会話データ、職場の日本人同士の会話データを収集することができれば、実習生のあいづち習得に影響を与えた、より具体的な環境要因について言及できるのではないだろうか。以上のことを換言すると、日本語母語話者の様々な人間関係における会話で使用されるあいづちを分析し、その結果との比較によって実習生の習得レベルを把握すること、そして、実習生の職場で使用されているあいづちの分析から、実習生のあいづち習得に影響を与える詳しい要因を考察することが今後の研究課題であるといえる。

注

- (1)「ソウ系」とは、「ソウ」「ソウソウ」「ソウカ」「ソウダネ」など、「ソウ」を使用したあいづち形式全般を指す。以下同様。
- (2)今石(1993)では、「確定+肯定の態度」を、納得、共感、同意の3項目、「確定+否定的態度」を、不信、不同意の2項目に更に細かく分類をしている。寺尾(2008)は、会話データからではこれらの下位分類を明確に行うことは困難であるとし、上位の分類にとどめている。本研究では、寺尾(2008)との結果の比較を行うことを考慮し、寺尾(2008)の分類に従う。
- (3)2010年7月以降は研修生という身分が廃止されて技能実習生に一本化されている。
- (4)混乱を避けるため、1期生の図表では、データ収集時の来日歴に斜体を使用している。
- (5)1期生のあいづち使用の総数は974、2期生のあいづち使用総数は391である。
- (6)1期生の使用したあいづち形式「ハイ」の総数は487、2期生の総数は257である。

- (7)熊(2008)の研究では非言語行動も対象としており、うなずきもあいづちの中に含まれている。
- (8)寺尾(2008)は、日本語学習者が初級の段階で「A:—ですか?」「B: (はい)、—です。」という問答文を頻繁に練習することから、「ソウ/ソウデス」という独自のあいづち形式を導き出したと結論付けている。
- (9)本研究と陳(2001)のあいづち形式の分類方法には多少の違いが見られる。陳では、《「はい」系》を「はい/はい はい/ええ/ええ ええ/ええ ええ ええ/うん/うん うん/うん うん うん/うん はい はい/ふん」、《「そう」系》を「そう/そう そう/そう そう そう/そうですか↓ (語尾の音が下がる) /そうですねー/そーお/そーお↓/そうですよね/そだよね/そうなんですか↓」として定義している。

参考文献

- (1)今石幸子(1993)「聞き手の行動～あいづちの既定条件～」『阪大日本語研究』5, 95-109
- (2)熊紅芝(2008)「日本語と中国語のあいづち表現形式についての比較—待遇性の観点からの一考察—」『日中言語研究と日本語教育』1, 55-66
- (3)杉戸清樹(1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち」『日本語教育』67, 48-59
- (4)陳姿菁(2001)「日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み」『日本語教育』108, 24-33
- (5)寺尾綾(2008)「ある中国語を母語とする日本語学習者の言語的あいづち—日本語の習熟度からみた縦断的分析—」『阪大日本語研究』20, 91-117
- (6)水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7, 4-11
- (7)水野義道(1988)「中国語のあいづち」『日本語学』7, 13, 18-23
- (8)堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- (9)財団法人国際研修協力機構 (JITCO) HP <http://www.moj.go.jp/content/000033318.pdf> アクセス日 2011年12月10日

A Longitudinal Research of Acquisition of Japanese Back-channeling by Chinese Technical Intern Trainees

Tessai Yamanaka

This study investigates the acquisition of Japanese back-channeling by Chinese temporary residents in natural language environments. Speech data, obtained over 9 months, was analyzed to assess how technical intern trainees acquired Japanese back-channeling in their daily life. Finally, their acquisition hypotheses were presented.